

プロジェクト “笑顔の花を咲かせよう！”

— 東日本大震災復興支援活動（2） —

The Project “With a Wish for People to Smile Again！”

— Support Activities Affected by the Great East Japan Earthquake（2） —

菅瀬 君子 Kimiko Sugase

（愛知学泉短期大学生生活デザイン総合学科）

木村 典子 Noriko Kimura

（愛知学泉短期大学生生活デザイン総合学科）

寺部 直子 Naoko Terabe

（愛知学泉短期大学非常勤講師）

抄 録

2011年3月11日、甚大な被害をもたらした東日本大震災。愛知学泉大学・愛知学泉短期大学は、学生が組織する学生会が中心となり募金活動を行い、翌年2012年から宮城県気仙沼市・石巻市、岩手県陸前高田市・大船渡市を中心に10年間東北被災地支援活動を行ってきた。今回の紀要「東日本大震災（2）」では、「東日本大震災（1）」（2011年～2015年の活動記録）に続き、2016年～2020年の活動報告をする。学生らの東北被災地支援活動に行く前後における感想文のテキストマイニング分析を基に、活動前後の気持ちの変化について考察を行い、被災地の支援活動で育成される力を摸索した。

その結果、出現率の高い語は、活動前の共起ネットでは、特に「不安」と「心配」のカテゴリー。活動後の共起ネットでは、「思う」、「感じる」、「考える」、「学ぶ」のカテゴリーが抽出された。東北被災地での活動は、甚大な被害で多くの人が命を亡くした、という状況下での活動であることから、不安や心配を抱えていたが、現地での活動を実践していく中で、見て、聞いて、感じることで、人のために自ら考え行動できる力、協調性、社会性、思いやりの心（真心）を培うことができ成長できた。また、自身を振り返る機会になり、命の大切さを学ぶことができた。

キーワード

笑顔の花を咲かせよう（With a Wish for People to Smile Again）、東日本大震災（Great East Japan Earthquake）、支援活動（Support Activities Affected）、津波（tsunami）、奇跡の一本松（The Miracle Pine Tree）、灯ろう七夕まつり（Lantern Tanabata Festival）、ひまわり（Sunflower）、テキストマイニング分析（text mining analysis）、

目 次

- 1 はじめに
- 2 活動の分析方法
- 3 活動記録
- 4 活動の分析結果と考察
- 5 おわりに

1 はじめに

2011年3月11日、甚大な被害をもたらした東日本大震災。2022年3月11日、震災から11年を迎える。筆者らはこの間、宮城県気仙沼市、石巻市、岩手県陸前高田市、大船渡市を中心に現地での被災地支援活動(以後、支援活動と略す)を学生らと共に11年間(2011年～2021年)支援活動に取り組んできた。2011年から2015年の5年間の活動の取り組みについては、愛知学泉大学紀要第4巻第1号に、プロジェクト“笑顔の花を咲かせよう!”東日本大震災支援活動(1)にまとめた¹⁾。5年間の活動から、学生にしかできない支援は、大学で学んでいるスキルを活かしたものを、被災地で生活している生活弱者に寄り添うことを心掛けた交流が大切であること。学生たちが「被災地の方を気遣い、思いやり、活動する中で自身と向き合い、生き方について考える機会」が持てたこと。自身の命を守るにはどう行動したら良いか、避難の重要性、防災の必要性、地域への貢献について理解を深めることができた。

今回は、2016年から2020年の5年間の活動の取り組みと活動した被災地の写真を載せ記録としてまとめ、参加した学生らの活動前後における感想文のテキストマイニング分析を基に、活動前後の気持ちの変化について考察をし、被災地の支援活動で育成される力を摸索した。

2 活動の分析方法

2017年第7回支援活動での活動前・後における学生の感想文をKH Coderを活用して、解析と客観化を試みた。2017年の対象学生は18名である。

テキストマイニングにおける分析には、ソフトKH Coder 3b03 g.exeを使用した。KH Coderは、立命館大学の樋口耕一先生により開発され、社会学の分野での利用が想定された内容分析およびテキストマイニング用のソフトウェアである。文書形式のデータに含まれる語を自動的に切り出し、多変量解析することによって全体を要約、提示することができ、全体傾向を把握することができる。

また、どのような語が抽出されているかを検索する機能、文脈を確認するためのコンコーダンス機能が備わっている。その機能により、文脈に立ち返り語の使われ方を確認することができる。そのため、計量分析と原文解釈とを循環させる分析プロセスを実践できるソフトである。

2.1 分析方法 段階1

自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を避けながら、データの様子を探る。

多く出現した語の確認、語と語の結びつき、テキストの部分ごとの特徴、内容が似た文書の群を探る。

KH Coderのコマンドの「抽出語リスト」「抽出語検索」「共起ネットワーク」を使用する。

多く出現していたコードの確認、コード間の結びつきの特徴を探る。

3 活動記録

今回、2016年・2017年に訪問した大船渡市赤崎地区の大立(おおたち)応急仮設住宅(以後、仮設住宅と略す)は、撤去のため2018年8月31日をもって閉鎖された。そのため、仮設住宅の住民の方は、津波時の浸水などを回避するため、赤崎地区の高台に新居を構え移転した。なお、2014年に訪問した猪川(いかわ)地区の轆轤石(ろくろいし)応急仮設住宅は、撤去のため2016年6月30日をもって閉鎖された。2018年・2019年に訪問時には、元・大立仮設住宅と猪川轆轤石仮設住宅の居住者の方が、赤崎町永浜地区公民館に集い交流した。

3.1 第6回支援活動(2016年)

気仙沼市大島小学校児童・保育所園児、大船渡市仮設住宅住民と交流
大船渡津波伝承館語り部による被災体験談

日 程	2016年8月22日～8月25日(3泊4日)	
交通手段	名古屋ーノ関閘(新幹線)ーノ関ー現地(バス移動7時間)	
行 程	8/22: ①移動 ◎気仙沼市の震災当時の様子について講話(宿泊ホテル支配人小泉様より)	
	8/23午前: ①気仙沼市立大島小学校児童・保育所園児とゲーム、 工作で交流(大島小学校体育館) 午後: ②菊田繁四郎先生の講話(当時:大島児童館館長) 被災の経験談と地震の備えについて ◎大島地区被災地見学	
	※大島へは気仙沼港フェリー乗船:気仙沼へ浦の浜港	
	8/24午前: ①大船渡津波伝承館語り部による津波映像の解説と 被災体験談「あなたに助かってほしいから」 防災教育(防災・減災)、質疑応答 午後: ②大船渡市大立仮設住宅にて、茶話会・手遊び歌・ ゲーム・工作などで交流 ◎陸前高田市”奇跡の一本松”、市街地見学	
	※気仙沼から大船渡市、陸前高田市へはバスで移動	
	◎3日間の活動を通しての振り返りと総括	
	8/25: 終日移動	

学生会役員、大学祭実行委員会、サークル部員、短期大学生活デザイン総合学科2年生、学生総勢13名と教職員3名が参加をした。

活動2日目午前、前年に引き続き気仙沼市立大島小学校で児童と園児に、ゲーム(さかなつり)、工作(けん玉、オリジナルコップ、うちわ、缶バッジ)で交流をした(写真1・2・3・4)。昨年、保育所の年長園児が、小学1年生になり、私たちとの交流を楽しみに待っていてくれた。さかなつりゲーム・紙コップのけん玉、かわいい缶バッジ・うちわ・デコレーションコップの工作で、楽しくコミュニケーションを図りながら交流した。(写真5)



上段：左写真1 さかなつりゲーム 右写真2 けん玉
下段：左写真3 缶バッジ 右写真4 うちわ
(2016.8/23)



写真5 大島小学校児童のみなさんと
(大島小学校体育館にて) (2016.8/23)

2日目午後は、児童館館長の菊田先生の講話「忘れない3.11 東日本大震災から5年」震災当時の大島の様子と地震の心構え。気仙沼市大島出身の水上 不二(詩人、童話作家、絵本作家、作詞家)作詞の「いわし」を菊田先生のギターで合唱した。講話後は、校内を見学、廊下の壁やショーケースには、国内外から激励のメッセージや千羽鶴が飾られていた。(写真6・7)震災から5年経過した大島地区を見学した。東日本大震災で、大きな被害を受けた大島地区、この地区の菅原進さん宅を訪問した。菅原さんは、大島と本土の気仙沼港を結ぶ連絡船「ひまわり」船長である。「ひまわり」は、島民の足として40年以上活躍した。船長の菅原進さんから、震災当時の状況

やその時、自身がとった行動など詳しく話を聞くことができた。(写真8)



左写真6 菊田先生「忘れない3.11 東日本大震災から5年」
右写真7 小学校校内見学、国内外からの激励のメッセージ
(2016.8/23)



写真8 連絡船「ひまわり」菅原船長さん
夫妻と自宅前で (2016.8/23)

活動3日目午前、大船渡津波伝承館での、語り部による津波映像の解説と被災体験談。館長の齊藤賢治氏が語り部として解説してくれた。齊藤さんは、自身が撮影された地震発生の瞬間から津波が到達するまでの映像を使い当時の様子を説明し、津波の脅威、避難のあり方、命を守るにはどう行動したら良いか学生たちに問いかけながら解説してくれた。学生たちは、「言葉にならない。こんなにひどい状況だとは思わなかった」、「津波を甘く見てはいけない、怖い」、「すぐ高台へ逃げること」、「南海トラフ地震対策の準備を早急にするべき」などの感想であった。学生を引率して3回目になるが、海がなく津波の心配がない場所に住んでいる学生たちにも、津波の知識や怖さを知る必要性を痛感した。だからこそ、毎年東北支援活動に来る際は、大船渡津波伝承館の訪問は欠かせない。(写真9)。



写真9 大船渡津波伝承館館長の齋藤氏による被災体験談
(2016.8/24)

活動3日目午後は、大船渡市内の大立仮設住宅で暮らす高齢者らと、約2時間、手遊び歌・ゲーム・

工作・タクティールケア・茶話会で交流をした。大立仮設住宅には、2014年に夏野菜カレーの炊き出しで交流して以来2回目の訪問となった。震災から5年経過し仮設住宅での生活も慣れてきたように感じられたが、会話をする中で、夏の暑さ、冬の寒さでの仮設住宅での暮らしは大変な様子が伺えた。そのような状況の中でも、孫世代の学生のたちとの交流を楽しみにしてきてくれた。最初はお互い遠慮をし、よそよそしさも感じられたが、学生一人ひとりが、自己紹介や面白おかしくみんなで手遊び歌とゲームで場を和ませた。これは2日目の活動後、ミーティングをし、手遊び歌の担当を決め、どのようなパフォーマンスをするか入念な準備をした成果である。手遊び歌、工作、タクティールケア、茶話会で楽しく交流した。(写真10・11・12・13・14)



上段：左写真10 手遊び歌
上段：右写真11 工作（カップ）
中段：左写真12 工作（けん玉）
(2016.8/23)



下段：左写真13 茶話会（和菓子とお茶）
下段：右写真14 タクティールケア
(途中から肩もみに変化) (2016.8/23)

タクティールとは、ラテン語の「タクティリス(Taktilis)」に由来する言葉で、「触れる」という意味がある。その意味が示すように、手を使って10分間程度、相手の背中や手足を「押す」のではなく、やわらかく包み込むように触れるのがタクティールケアである。タクティールケアのやり方は、事前に木村(筆者)からレクチャーを受け、学生同士で確

認し準備をしたが、最後はどの学生も写真14のように、肩もみになってしまった。しかし、高齢者には、この肩もみスタイルが人気だった。

3.2 第7回支援活動(2017年)

大船渡津波伝承館語り部による被災体験談

陸前高田市震災遺構「旧道の駅高田松原 タピック45」見学

大船渡市仮設住宅住民と交流、気仙沼市大島小学校児童・保育所園児と交流、「津波をこえたひまわりさん」船長菅原進さんによる講話

日程	2017年8月20日～8月23日(3泊4日)
交通手段	名古屋ーノノ関(新幹線)ーノ関ー現地(バス移動1時間)
行程	8/20: ①移動 ②気仙沼市の震災当時の様子について講話 (宿泊ホテル支配人小泉様より)
	8/21午前: ①陸前高田市震災遺構 「旧道の駅高田松原タピック45」見学 ②大船渡津波伝承館語り部による津波映像の解説と被災体験談「あなたに助かってほしいから」防災教育
	午後: ③大船渡市大立仮設住宅にて、茶話会・手遊び歌・工作・合唱・タクティールケアなどで交流
	④陸前高田市「奇跡の一本松」、市街地見学
	⑤活動の振り返り(一人ひとり発表)
	3日目の活動準備と確認
	8/22午前: ①気仙沼市立大島小学校児童・保育所園児とゲーム、工作、合唱で交流(大島小学校体育館)
	午後: ②「客船ひまわり号 菅原進船長」の講話 ③気仙沼市大島地区見学(震災から6年経過)ひまわり号船長宅を訪問
	※大島へは気仙沼港フェリー乗船: 気仙沼ー浦の浜港
	④3日間の活動を通しての振り返りと総括
8/23: 終日移動	

学生会役員、ボランティアサークル、合唱部員、学生総勢18名と教職員6名が参加をした。

第7回支援活動は、リーダー、サブリーダー制を取り入れ活動を行った。参加学生のリーダーは、今回の参加が3回目となる学部4年男子学生2名、この2人をリーダーにし、メンバーをまとめ、適切な指示を出す役目を担い、4日間の活動を調整した。さらに、リーダーをサポートする役目を担うサブリーダー2名を日替わりで選出した。他の参加者は活動内容ごとに責任を担う体制をとった。引率の教職員は、学生のサポートをする。学生は、それぞれ置かれている立場によって、担当教員への報告・連絡・相談(ほうれんそう)の徹底を図った。

活動1日目は移動日(名古屋～気仙沼)宿泊先には、17:30に到着。

①夕食後、ホテル支配人の小泉さんによる、震災当時のホテル周辺の被害状況とホテルとしての震災対応についての講話。(写真15)



写真 15 ホテル支配人による講話 (2017.8/20)

気仙沼湾は津波により破壊された燃油タンクから大量の重油が流出し、ものすごい炎と煙で火の海だった。

少し高台にあるホテルも炎に包まれてしまう危機感を感じ、お客様と一緒に従業員も避難した。津波がすごい勢いで家・車・漁船を飲み込み流れていく様など、映像を映し出し、震災当時の様子を詳しく説明していただいた。仮設住宅ができるまでの2次避難場所として客室を提供し、多くの市民の方々を支援された。

②合唱部によるコーラス

今回、初の試みとして合唱部が参加し、活動先にて歌を披露。また、参加者全員で、東日本大震災の復興を応援するために制作された復興支援ソング「花は咲く」に振り付けをし、合唱した。合唱部顧問の白鳥清子先生の指導のもと全員で合唱の練習、一ノ関からバスで気仙沼市内に着くまでの移動時間1時間、ホテル支配人講話後の2時間、練習は計3時間に及んだ。白鳥先生の熱心な指導で素晴らしいハーモニーを奏でるまでに上達した。(写真16・写真17)



写真 16・17 「花は咲く」合唱の練習 (2017.8/20)

活動2日目午前、大船渡津波伝承館に行く途中、陸前高田市震災遺構「旧道の駅高田松原 タピック45」を見学した。「タピック45」は、陸前高田市のインフォメーションセンターであったが、東日本大震災の津波により被災した。建物は津波の恐ろしさを後世に語り継ぐため、震災遺構として保存されている。建物の中は、ぐちゃぐちゃで鉄骨がむき出しになっている。津波の破壊力の恐ろしさが伝わってくる。道路脇には、大きな枯れた松の木がいくつも横たわっていた。フェンスの向こう側には、ショベル

カーががれきの処理をしていた。復興にはまだ遠いように感じた。(写真18・19)



写真 18・19 「タピック45」鉄骨がむき出し (2017.8/21)

活動2日目午後は、大船渡市内の大立仮設住宅で暮らす高齢者らと、約2時間、手遊び歌・工作・合唱・茶話会で交流をした。大立仮設住宅には今回で3回目の訪問となる。懐かしい顔が何人か見られ、1年ぶりの再会に笑顔になった。少しずつ皆さんと心が通うようになり、相談事も聞くようになった。子ども達も少しずつ心を開いてくれるようになり、別れ際には、もっと一緒に遊ぼうと学生の手を放さない子や、また来てねと指切りする子もいた。子どもたちの中には、震災で親、兄妹、祖父母を亡くした子もいる。一生懸命生きていこうとする姿勢に勇気付けられ胸が熱くなった。また来年も来るからね、と約束した。(写真20・21・22・23)



上段：左写真 209 合唱部
上段：右写真 21 折紙で花
下段：茶話会 22
(おちゃっこ)
(2017.8/21)



写真 23 大立仮設住宅のみなさんと (2017.8/21)

活動3日目の午前、前年に引き続き気仙沼市立大島小学校で児童と園児に、ゲーム(さかなつり)、工作(カスタネット、紙のお皿ポケット・缶バッジ)で交流をした。今回は事前に、折紙で妖怪ウォッチ・コマを作り、参加者(園児・児童)にプレゼントした。気持ちをほぐし親近感がわく工夫として、①みんなで歌いながら体を動かす(合唱部担当)。②手遊び歌(リーダー担当)。③ゲーム、工作の説明(サブリーダー)。この①②③を全員でサポートする。

(写真24・25・26・27)



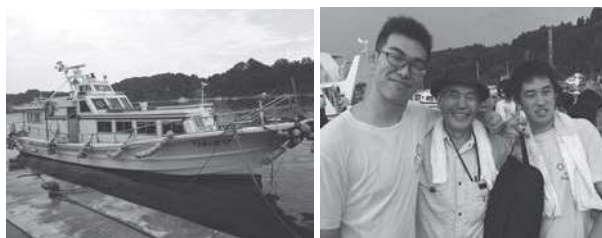
上段：左写真24 となりのトトロより「さんぽ」合唱
 上段：右写真25 手遊び歌
 下段：左写真26 ゲーム・工作の悦明
 下段：右写真27 プレゼント (2017.8/22)

④活動のテーマである「笑顔の花を咲かせよう！」Tシャツを着用する。⑤カラー布テープに自分の名前を記し、Tシャツに貼る。⑥園児、児童にも名前を記したテープを貼ってもらう。⑦笑顔で名前を呼びあうことを心掛ける。①～⑦は、今まで活動してきたことを振り返り工夫した点である。(写真28・29・30・31)



上段：左写真28 全員で作業 右写真29 フレンドリー
 下段：左写真30 右写真31 Tシャツには、名前テープが貼られている (2017.8/22)

活動3日目の午後、昨年同様、大きな被害を受けた大島地区を見学した。連絡船「ひまわり」船長の菅原進さん宅を訪問。訪問後「ひまわり」と対面した。菅原さんの笑顔最高。(写真32・33・34)



上左写真32 ひまわり
 上右写真33
 下写真34 菅原さんを囲んで (2017.8/22)



大島の浦ノ浜港から気仙沼エアポートに戻る船外から、2014年から進められてきた、気仙沼大島と本土をつなぐ「気仙沼大島大橋」のアーチが見えた。開通は、2019年4月。2014年から大島での活動の楽しみの一つに、フェリーでの移動がある。乗船する際、カモメが大好きなかつばえびせんを買い乗り込む。動き出すとどこからともなくカモメが寄ってくる。えびせんを差し出すと上手にくちばしの先で摘まみ、再び旋回して近づいてくる。活動する前の緊張をほぐしてくれた。時々、指先を噛まれるが学生たちは喜んで噛まれていた。「気仙沼大島大橋」の開通に伴い、定期航路の運航が終了する。寂しい。(写真35・36)



左写真35 浦の浜港から気仙沼行乗船
 右写真36 かつばえびせんとカモメ (2017.8/22)

宿泊先、気仙沼ホテル観洋のみなさま、ありがとうございました。(写真37)



右写真37 (2017.8/22)

3.3 第8回支援活動(2018年)

岩手県大船渡市盛町 灯ろう七夕まつり

大船渡津波伝承館語り部による被災体験談

元・大船渡大立仮設&ろくろ石仮設住宅住民

合同交流会(永浜地区公民館)

気仙沼市大島小学校児童・保育所園児と交流

「津波をこえたひまわりさん」船長菅原進さんによる講話

日程	前半：2018年8月6日～8月8日(2泊3日) 後半：2018年8月20日～8月23日(3泊4日)
交通手段	前半・後半：名古屋～一ノ関(新幹線) 一ノ関～現地(バス移動1時間)
行程 (前半)	8/6:移動(名古屋～一ノ関～盛町) 活動：岩手県大船渡市盛(さかり)町 灯ろう七夕まつり参加 前夜祭①願いごと風船の受付(15時～16時30分シャトルセンターにて) ②風船リリース準備(16時30分～18時) ③願いごと風船セレモニー(18時～) ④願いごと短冊受付開始・飾り(18時半～)
	8/7:活動(灯ろう七夕まつり参加) 本祭 ①願いごと短冊受付・飾り(17時～20時) ②あんどん七夕山車練り歩き、山車引き(17時～20時) ※灯ろう七夕まつりは、大船渡市盛町さかり中央通商店街にて
	8/8:終日移動
	8/20:①移動(名古屋～一ノ関～気仙沼市) ②気仙沼市の震災当時から現在までの様子について講話 (宿泊ホテル支配人小泉様より)
	8/21午前:③陸前高田市震災遺構 「旧道の駅高田松原タビック45」見学 ④大船渡津波伝承館にて、語り部による津波映像の解説 被災体験談「あなたに助かってほしいから」防災教育
	午後:⑤大船渡市赤崎町永浜地区公民館にて、 元・大船渡大立仮設住宅&ろくろ石仮設住宅居住者 との合同交流会 茶話会・手遊び歌・寸劇・工作など ⑥陸前高田市被災地「奇跡の一本松」見学 ⑦活動の振り返り(一人ひとり発表)
	3日目の活動準備と確認
	8/22午前:⑧気仙沼市立大島小学校児童・保育所園児とゲーム、 工作、寸劇で交流(大島小学校体育館) 午後:⑨「客船ひまわり号 菅原進船長」の講話 ⑩気仙沼市大島地区見学(震災から7年経過) ひまわり号船長宅を訪問
	※大島へは気仙沼港フェリー乗船：気仙沼～浦の浜港 ⑪3日間の活動を通しての振り返りと総括
	8/23⑫気仙沼海の市「氷の水族館(マイナス20℃)」見学 ⑬移動

第8回支援活動は、前半(8/6～8/8)、後半(8/20～8/23)に分け行った。前半の参加者は、学生会役員5名、ボランティアサークル2名、教員3名の10名が参加をした。

前半は、毎年8月6日と7日に開催される、盛町灯ろう七夕まつりに参加をした。盛町中央通り商店街を中心に、伝統的な七夕飾り、夜は明かりを灯した「灯ろう七夕山車」引き練り歩き。初日6日は午後6時ころから、盛町前通りでオープニングセレモニー「願いごと風船リリース」を実施。震災後から安城七夕まつり協賛会が支援し、願いごとが書かれた風船を一斉に空へ放つ。今回、安城七夕まつり協賛会の依頼により、そのお手伝いをした。作業内容は、風船600個にヘリウムガスを注入、風船が飛ば

ないように大きな網袋に入れる。祭りに集った人たちに配り、オープンセレモニー「願いごと風船リリース」風船を一斉に空へ放つ。空に舞い上がる色とりどりの風船は圧巻だった。(写真38・39・40)



上写真 38・39

風船600個にヘリウムガスを注入。風船が飛ばないように大きな網袋に。



写真 40 オープニングセレモニー「願いごと風船リリース」を実施(2018.8/6)

翌日夜には、「灯ろう七夕山車」引き練り歩きに参加。田茂山少年七夕組の山車の上に乗せてもらい、「電線よけ」と呼ばれる「Y」の形をした棒切れを使い、商店街の両端にある電線を避けながらの山車引き練り歩きは迫力があつた。貴重な体験をすることができた。(写真41・42)



左写真 41「電線よけ」の棒で田園を避ける

右写真 42 山車を後方から押す(2018.8/7)

後半は、8/20～8/23日、学生会8名、ボランティアサークル2名、生活デザイン総合学科2年生7名、教員3名の20名が参加をした。

①活動1日目は移動日(名古屋～気仙沼)宿泊先には、17:30に到着。夕食後、ホテル支配人の小泉さんによる、震災当時のホテル周辺の被害状況とホテルとしての震災対応について講話。2日目の準備と確認。

②図書館司書士資格取得をめざす学生が参加し、日ごろ学んでいる、「本の読み聞かせ」と「寸劇」を披露。寸劇は「大きなかぶ」参加者全員で「うんとこしょ どっこいしょ」と掛け声をかけながら、かぶを引っ張り、みんなで協力することの大切さや楽しさを知ってもらう。事前に、お爺さん、お婆さん、犬、猫、ネズミなどのお面を作り、そのお面をかぶり、

劇をする。劇は活動訪問先で上演する。配役を決め、1時間半リハーサルを行った。

大船渡へ行く途中、陸前高田市震災遺構「旧道の駅高田松原タピック45」を見学した。大船渡津波伝承館では、齊藤賢治館長が語り部として解説してくれた。震災当日の津波映像は、何回視聴しても心打たれる映像である。

活動2日目午後は、大船渡大立仮設住宅、轆轤石仮設住宅は撤去閉鎖のため、住民らは新居や公営アパートなどに移転した。2018年訪問時には、元・大立仮設住宅と猪川轆轤石仮設住宅の居住者の方が、赤崎町永浜地区公民館に集い、手遊び歌、紙芝居、寸劇、工作で交流した。

今回初めての試みとして、「うんとこしょ どっこいしょ」と大きな声を掛けあい、「おおきなかぶ」の劇やポストカード、ガーランドの工作で楽しんだ。(写真43・44)



左写真43 ポストカード



右写真44 ガーランド
(2018.8/21)

活動後、陸前高田市街地、震災遺構「奇跡の一本松」を見学。高田地区海岸の防潮堤がほぼ完成、高さ12.5メートル、全長約2キロ、数十～百数十年に一度の11.5メートルクラスの津波に耐えるという。

防潮堤周辺では、大型トラック、ショベルカーなど工事がされていた。夕食後、2日目の活動の振り返りと3日目の準備を行った。(写真45・46)



左写真45 高田地区海岸の防潮堤



右写真46 活動の振り返りと準備 (2018.8/21)

活動3日目午前、前年に引き続き気仙沼市立大島小学校で児童と園児に、ゲーム(さかなつり)、工作(うちわ・ガーランド・ポストカード)で交流をした。今回は、子どもたちの緊張をほぐすために、大きな絵本の読み聞かせ、「おきなかぶ」の劇を行った。「うんと

こ どっこいしょ」と、大きな声を掛け合い、かぶを引き抜いた。一体感が生まれ、体育中が笑顔で包まれた。(写真47・48・49)。



上段：左写真47 大きな絵本の読み聞かせ

上段：右写真48 工作(うちわ)

下段：写真49 劇「おきなかぶ」(2018.8/22)

活動3日目午後、連絡船「ひまわり」船長の菅原進さんに、震災のあった日のことを聞くことができました。「ひまわり」と共に津波に向かって海に出ていった。自動車、トラック、ドラム缶などが流され、何軒もつながった家までも流されてきた。「ひまわり」が、小さな体で頑張っているから自分も頑張れと励



ましたそうだ。死ぬも生きるもいっしょだぞ。「ひまわり」行くぞと言って津波に立ち向かった。菅原さんと「ひまわり」は一心同体、強い絆で結ばれているのがよくわかった。菅原さんは、海を知り尽くした強くて優しい海男だと思った。そして、大島のある三陸海岸地域には、「津波てんでんこ」という言葉があり、津波のときは、誰かを待たずに、早く逃げる。命が大切。てんでんばらばらになっても、逃げる。この言葉は、大船渡津波伝承館館長の齊藤賢治氏も同じことを教えてくれた。

(写真50・51・52)

上写真50 菅原進船長

下写真51 「ひまわり」

船内、菅原さんと座席は廃車になったバスのシートを再利用
(2018.8/22)





写真 52 「ひまわり」、菅原さんと共に
笑顔の花が咲きました！(2018.8/22)

3.4 第9回支援活動(2019年)

岩手県大船渡市盛町 灯ろう七夕まつり
元・大船渡大立仮設&ろくろ石仮設住宅住民
合同交流会(永浜地区公民館)
愛知学泉大学・安城学園高等学校オーケストラ
コンサート2019
防災教育受講(雄勝ローズファクトリーガーデン)

日程	前半：2019年8月5日～8月8日(3泊4日) 安城学園高等学校生徒会・岡崎学舎学生会合同参加 後半：2019年8月16日～8月19日(3泊4日)
交通手段	前半・後半：名古屋～一ノ関(新幹線) 一ノ関～現地(バス移動1時間)
行程 (前半)	8/5:①移動(名古屋～一ノ関～気仙沼) ②気仙沼市の震災当時から現在までの様子について講話 (宿泊ホテル支配人小泉様より) ③8/8～の活動についてのオリエンテーション
	8/6午前:①合同(高校・大学)での活動 大船渡市赤崎町永浜地区公民館にて、元・大立仮設住宅、ろくろ石仮設住宅居住者との交流会 茶話会・工作 午後:岩手県大船渡市盛(さかり)町 灯ろう七夕まつり参加 ①願いごと風船準備(13時～ジョブセンターにて準備) ②願いごと風船セレモニー(18時～) ③願いごと短冊受付開始・飾り(18時半～) 愛知学泉短期大学附属幼稚園年長組園児制作短冊展示
	8/7午前:①高校・大学別で活動 午後:合同(高校・大学)での活動(灯ろう七夕まつり参加) ①願いごと短冊受付・飾り ②あんどん七夕山車練り歩き、山車引き
	※灯ろう七夕まつりは、大船渡市盛町さかり中央通商店街にて
	8/8:①活動の振り返り(一人ひとり発表) ②陸前高田市被災地「奇跡の一本松」見学 ③移動
	8/16: ①移動(名古屋～一ノ関～気仙沼市) ②イタリアミランドラ音楽学校生歓迎会(司会・進行) 会場:気仙沼ホテル観洋大ホールにて ③歓迎交流会終了後、明日以降の活動についてミーティング
	8/17午前:①陸前高田市高田町東宮柳ヶ沢アパート集会所にて、アパート居住者と交流 手遊び歌・ゲーム・工作 午後:①愛知学泉大学・安城学園高等学校 オーケストラコンサート2019 ～東日本と愛知をつなぐ～ 安城学園・ミランドラ音楽学校・復興記念ステージ 会場:大船渡市民文化会館リアスホール 15:00開演 会場:気仙沼ホテル観洋大ホール 20:00開演 ②東北被災地支援活動パネル展示(大学岡崎学舎学生会) コンサート手伝い(準備・受付・片付け)
	8/18午前:防災教育プログラム受講 ①石巻市震災遺構大川小学校見学 (語り部:愛知学泉短期大学非常勤講師 寺部直子氏) ②「防災教育」雄勝ローズファクトリーガーデン (震災語り部:徳水博志氏 元雄勝小学校教諭) 午後:③南三陸さんさん商店街、震災遺構見学 ④活動の振り返り(一人ひとり発表)
	8/19:移動

第9回支援活動は、前半(8/5～8/8)、後半(8/16～8/19)に分け行った。前半は、安城学園高等学校生徒会と共同で活動。後半は、学生会役員6名、大

学祭実行委員1名、ボランティアサークル3名、教員2名の12名が参加をした。

前半は、毎年8月6日と7日に開催される、盛町灯ろう七夕まつりに参加をした。活動内容は、2018年と同様である。今回、「願いごと短冊」には、愛知学泉短期大学附属幼稚園の年長組園児が短冊に願いごとを書いてくれた。(写真53・54)



写真 53・54 園児・高校生・短大生で短冊書き

(2019.7/25)

活動2日目午前は、高校・大学共に活動をした。大船渡赤崎町の永浜地区公民館で、元・大立仮設住宅で暮らしていた方々と茶話会・工作(うちわ)などで交流をした。赤崎町永浜地区公民館に集い、手遊び歌、紙芝居、寸劇、工作で交流した。永浜鹿踊保存会の方から、地元につながる伝統芸能鹿踊りの説明があり、貴重な文化財に触れることができた。(写真55・56・57)



写真 55 伝統芸能鹿踊り頭をかぶり体験

写真 56 応援うちわづくり (2019.8/6)



写真 57 元・大船渡大立仮設住宅のみなさんと交流(永浜地区公民館)(2019.8/6)

交流後、盛町商店街に戻り、「願いごと風船リリース」の準備と盛町前通りでのオープニングセレモニーへ、高校生らと参加した。準備した「願いごと風船」を無事空へ放つことができた。(写真58・59)



上写真 58 「願いごと風船」
大空へ
下写真 59 大船渡市
マスコット
おおふなトン (2019.8/6)

また、商店街のお店を間借りし、安城七夕まつり協賛会安城七夕まつり名物の「願いごと短冊」のコーナーを設置し、地元の方に書いてもらい、系列校の愛知学泉短期大学附属幼稚園の園児たちに書いてもらった短冊と一緒に飾った。大勢の人に書いてもらった短冊は、安城七夕神社に奉納する。男子学生、生徒は毎年お世話になっている田茂山地区の山車引きに参加させてもらった。貴重な経験をする事ができた。(写真 60・61・62)



右写真 60・61 「願いごと短冊」コーナー (2019.8/7)

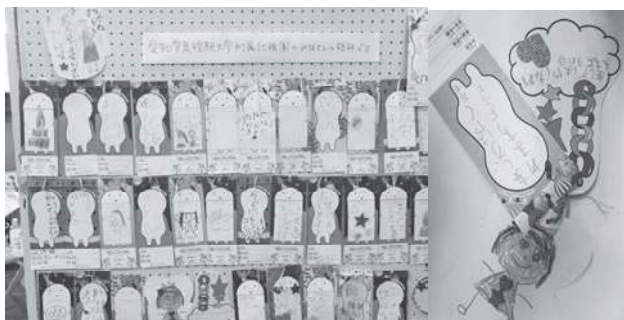
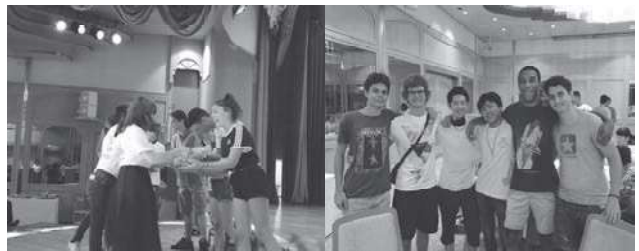


写真 62 愛知学泉短期大学附属幼稚園 年長園児らが、
灯ろう七夕祭りのために書いた短冊 (2019.8/7)

後半は、愛知学泉大学・安城学園高等学校オーケストラコンサート 2019～東日本と愛知をつなぐ～、が8/17日、大船渡市民文化会館リアスホールと気仙沼沼ホテル観洋大ホールにて公演。このコンサートに

は、高校・大学合唱部が「復興祈念ステージ」に出演した。また、岡崎学舎学学生会がコンサートの支援をした。オール安城学園での活動となった。このコンサートには、愛知学泉大学オーケストラ部と交流のある、イタリア・ミランドラ音楽学校生によるステージも企画された。17日の公演前日には、ミランドラ音楽学校の歓迎会では、学生会の学生らが中心になり司会進行係などを務めた。学生たちは、イタリア語 翻訳サイトを利用しての会話を楽しんだ。
(写真 63・64)



上写真 63 ミランドラ音楽学校生らとの交流会
下写真 64 安城学園高等学校弦楽部による演奏 (2019.8/16)

活動2日目午前、岩手県陸前高田市災害公営住宅「県営栃ヶ沢アパート」で暮らす方々と交流。同アパートは県内で最大規模の災害公営住宅。9階建てと8階建ての2棟計301戸に8月末時点で227世帯が暮らす。住民は県内外の仮設住宅など約50ヶ所から集まっている。陸前高田市では、平成28年度末までに、11ヶ所、895世帯の災害公営住宅が完成。その中で、平成28年7月に入居開始となった栃ヶ沢災害公営住宅は、1号棟3ブロック、2号棟3ブロックに分かれた計301戸の県内で最大の災害公営住宅である。自治会長を務める紺野和人さんのお世話により、15名の方とアパートの集会所で、ゲーム・工作(ポストカード)・茶話会などで楽しんだ。紺野さんから、朝は、集会所前の広場に住民のお年寄りらが集まり、ラジオ体操を楽しみ、夏は七夕まつりなどを催し、住民同士がコミュニケーションを図れるように心掛けている。また、私たちのようなボランティア団体が来

た時には、特に一人暮らしの人に声掛けをするそうだ。仮設住宅のような、隣近所での交流が難しく人との交流も疎遠になってしまうことをなくすよう、心掛けていたそうだ。特に若い人たちが来てくれるのは嬉しいと喜ばれた。(写真 65・66・67)



左写真 65 「おちゃっこ」をしながら工作
 中写真 66 素敵なポストカードができました
 右写真 67 15 人の方が参加 (2019.8/17)

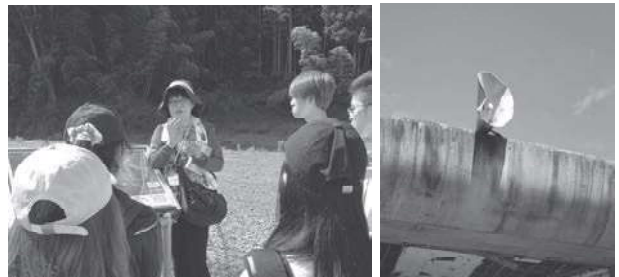
2 日目活動午後は、東日本と愛知をつなぐオーケストラコンサート、大船渡講演・気仙沼公演。(写真 68・69)



左写真 68 寺部理事長の挨拶
 右写真 69 ミランドラ音楽学校、高校・大学合唱部とのジョイント (2019.8/17)

3 日目活動午前、7:45 にホテルを出発し、石巻市震災遺構大川小学校へむかった。震災時、津波が地震発生後およそ 50 分経った 15 時 36 分頃、三陸海岸・追波湾の湾奥にある新北上川を遡上してきた。この結果、河口から約 5km の距離にある学校を襲い、校庭にいた児童 78 名中 74 名と、教職員 13 名中、校内にいた 11 名のうち 10 名が死亡した。その他、学校に避難してきた地域住民や保護者のほか、スクールバスの運転手も死亡している²⁾。

今回、支援活動に参加した学生の中には、幼稚園・小学校・中学校・高等学校教諭、保育士など教育の現場に就くことを希望する者がいる。なぜ多くの児童が犠牲になったかを知り、なぜ防ぐことができなかったか、どうすれば命を守れたかなど、実際に現地に行き、見て、聞いて、感じ、一人ひとりが考えるきっかけにしてほしいという思いから、防災教育プログラムを受講することにした。大震災遺構大川小学校では、筆者の寺部(筆者)が語り部として解説した。一部の先生と数人の児童が裏山に上り津波の難を逃れ助かった。その裏山に上った。ここまで津波が来たのか、複雑な気持ちが胸の中で渦巻いた。学生たちから、「信じられない」という声、屋外放送用の大型ホーンスピーカーがねじ曲がり、太いコンクリートの柱が倒れ、天井が崩れ、本当に信じられない光景に言葉を失った。モダンで素敵な校舎が無残な姿に変わってしまい、自然災害の脅威を目のあたりにした。(写真 70. 71. 72)



上段左写真 70 語り部(寺部)
 上段右写真 71 ねじ曲がったスピーカー
 下段写真 72 残された校舎 (2019.8/18)

震災遺構大川小学校から、石巻市雄勝町にある雄勝ローズファクトリーガーデンに向かった。ここでは、東日本大震災の体験を基にした防災教育プログラム「語り部・防災教育」を受講した。震災体験を継承する語り部である徳水博志さん(震災当時、雄勝小学校の教師をされていた)から、津波のメカニズムや基礎的な知識、徳水さんが震災時、児童たちと一次避難した避難経路をたどり津波が押し寄せた裏山に上った。現場を見、自らの体験談をもとにした話を聞き、災害の教訓、命を守る行動を学んだ。今回受講した場所は、ガーデン内の一角にあるプレハブの研修所である。(写真 73・74・75)



上段写真 73・74・
語り部徳水さん
中段写真 75
被災後に見つけた
教室の時計、15時 29
分で止まっている



震災でガーデン一帯は津波に飲み込まれ、がれきだらけであったが、徳水夫妻が花を植え、全国のボランティアの方が支援し素敵なガーデンに生まれ変わった。私たちが訪問したのは8月の中旬、残暑が厳しい時期であったが、お花を楽しみながら、カフェで美味しいローズティーやソフトクリームをいただき、癒しのひと時を過ごした。お礼に合唱部が「花は咲く」の歌を届けた。(写真 76)



写真 76 徳水夫妻、ガーデンの方と(2019.8/18)

防災教育プログラムを受講後、土盛りした土地に建築された南三陸さんさん商店街に寄った。南三陸町は津波に襲われ、市街地が壊滅した。職員ら43名が犠牲になった南三陸町防災対策庁舎、鉄骨だけ残った庁舎は震災遺構として残ることが決まった。「震災復興祈念公園」工事中のため、鉄骨だけ残った南三陸防災対策庁舎を車中から眺めた。津波の脅威を目のあたりにした。

予定したすべての活動を終え、夕食後、活動の振り返りをした。一人ひとり今回の活動の感想を述べ、思いを共有した。

(写真 77)



写真 77 活動の振り返り

「奇跡の一本松」一本の周りは完全には整備されておらず、工事車両が出入りしていた。近くまで立ち入ることができなかった。(写真 78)



写真 78

奇跡の一本松
陸前高田ユース
ホステル(震災
遺構)
(2019.8/19)

3.4 第10回支援活動(2020年)

コロナ感染症拡大防止のため、現地での支援活動は中止 手づくりマスクケース&石鹸を被災地へ

愛知学泉短期大学生生活デザイン総合学科、木村ゼミ・菅瀬ゼミが合同で、マスクケースとデコパージュ石鹸を手作りし、今まで交流のあった、気仙沼市、大船渡市の関係者らへ送った。

4 活動の分析結果と考察

4.1 段階1 頻出語

2017年の支援活動に行く前(以後、活動前と略す)、活動に行った後(以後、活動後と略す)における頻出語リストを表1(活動前)、表2(活動後)に示した。今回、「動詞・形容動詞」について抽出した。活動前では44語、活動後は82語、頻出語の多い語には、活動前「不安」の出現回数が20回と最も多く、活動後「思う」の出現回数が28回と最も多かった。

表1 2017年活動前 頻出語リスト(動詞・形容動詞)

NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数
1	不安	20	13	行く	2	25	終つ	1	37	怖がる	1
2	行く	13	14	接す	2	26	迎える	1	38	聞く	1
3	知る	10	15	薄れる	2	27	向かう	1	39	抱える	1
4	思う	8	16	分かる	2	28	向ける	1	40	抱える	1
5	考える	7	17	気軽	1	29	行ける	1	41	無くなる	1
6	見る	6	18	色々	1	30	合わせる	1	42	迷う	1
7	動く	3	19	身近	1	31	思える	1	43	役立つ	1
8	話す	3	20	精一杯	1	32	取り組む	1	44	語る	1
9	正直	2	21	大切	1	33	受ける	1			
10	会う	2	22	迷惑	1	34	足りる	1			
11	関わる	2	23	歌う	1	35	得る	1			
12	頑張る	2	24	慣れる	1	36	悲しむ	1			

表2 2017年活動後 頻出語リスト(動詞・形容動詞)

NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数	NO	抽出語	出現回数
1	思う	28	22	向ける	2	43	移す	1	64	受ける	1
2	感じる	13	23	思える	2	44	隠せる	1	65	癒る	1
3	大切	7	24	持つ	2	45	吸す	1	66	助け合う	1
4	終える	7	25	終わる	2	46	歌う	1	67	心がける	1
5	字ぶ	6	26	助かる	2	47	活かす	1	68	振り返る	1
6	頑張る	6	27	助ける	2	48	甘える	1	69	尽くす	1
7	見る	6	28	買う	2	49	喜ぶ	1	70	盛り上がる	1
8	考える	6	29	変わる	2	50	驚く	1	71	知れる	1
9	行く	6	30	はるか	1	51	終つ	1	72	伝わる	1
10	真剣	5	31	貴重	1	52	繋がる	1	73	動く	1
11	進む	5	32	元気	1	53	繋ぐ	1	74	動く	1
12	知る	5	33	幸せ	1	54	言う	1	75	得る	1
13	伝える	5	34	自然	1	55	語り継ぐ	1	76	入る	1
14	聞く	5	35	乗り気	1	56	向かう	1	77	備える	1
15	話す	5	36	心残り	1	57	広める	1	78	負ける	1
16	分かる	4	37	新た	1	58	高める	1	79	暮らす	1
17	来る	4	38	身近	1	59	始まる	1	80	抱く	1
18	不安	3	39	正直	1	60	支える	1	81	役に立つ	1
19	忘れる	3	40	素直	1	61	止める	1	82	役立つ	1
20	前向き	2	41	大事	1	62	持てる	1			
21	起きる	2	42	平和	1	63	取り上げる	1			

活動前・後での最も多かった出現率(語全体に対して)は、活動前「不安」45%、活動後「思う」38%、「感じる」16%であった。第7回支援活動(2017年)に参加した学生たちは、震災時は中学1年～3年生である。震災の被害状況について、どの程度関心があったかは分からないが、東北への支援活動に対し不安が大きかったことは伺えた。不安を抱えての活動であったが、活動後は「不安」4%と少なく、活動を通して何か「思う」こと「感じる」ことにつながったのではないか。前向きな気持ちに変化したことが伺えた。

4.2 段階1 共起ネット

出現率の高い語について、他の語との関わり、コード間の結びつき、特徴を探ってみた。それを見たものが、図1(活動前)、図2(活動後)である。

図1の活動前の共起ネットでは、5つのカテゴリーに分けられたが、注目するのは、二つのカテゴリーにある「不安」と「心配」である。

学生の感想文から「不安」は、東北支援活動にいくにあたり、東北がどのような状況になっているか不安と、東北に行って、自分は何ができるかが不安であった。「心配」は、ニュースなどで東北の震災の状況についての情報で知っているのみで、実際どのような状況であるか心配であった。

図2の活動後の共起ネットでは、5つのカテゴリーに分けられた。「思う」と「感じる」「考える」「学

ぶ」と「終える」のカテゴリーに注目する。

「思う」は、学生が思ったことは、「今回の経験を経験として終わらせてはいけない」、「ニュースで得た情報からは、わからない東北の人の復興にかける気持ち、今も、頑張っている、自分ができることからしていきたいと思った、身近なことで復興、災害について伝えることが大切と思った。

「感じる」「考える」「学ぶ」から、東北支援活動の経験から感じとり考える。学生の中で、経験の進化、深化があると思われた。

「終える」から、気持ちの変化が伺えた。今回の経験から、自分について考え、行動に移そうとしていることが伺えた。震災のことを自分のことととらえ周囲に伝える、東北支援活動に参加するなどである。

頻出語の出現率で、学生の感想文のセンテンスから「思う」に関わる内容を読み取ってみた。

①現地の人からもらった、元気、勇気、希望を力に頑張りたいと 思った。

②実際に行くと災害は想像よりもはるかに大きく、怖いと 思いました。

③現場でその怖さに負けない人々を見て、自分たちがいかに現状に甘えているなど 思った。

④活動に参加して、自分が学んだことを少しでも周囲に発信していくことが大切だと 思うようになった。

⑤被災地に来る前は、不安もあったが、活動を終えて、人のために活動することが幸せだと 思った。

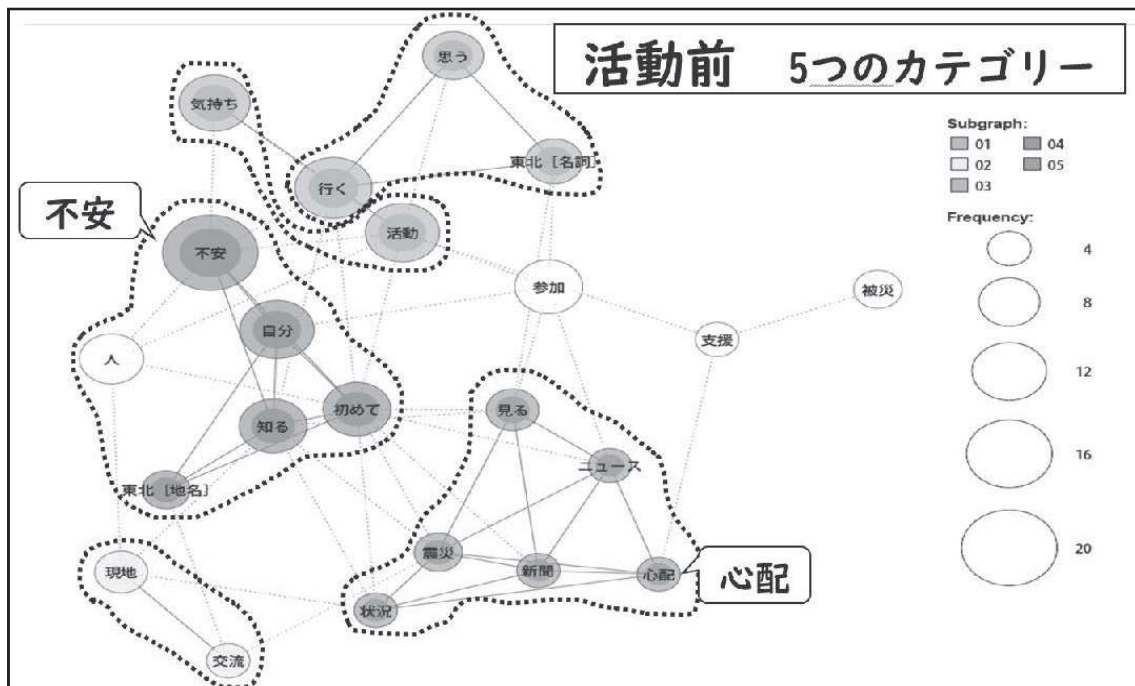


図1 2017年活動前 語の共起ネット 関連語検索

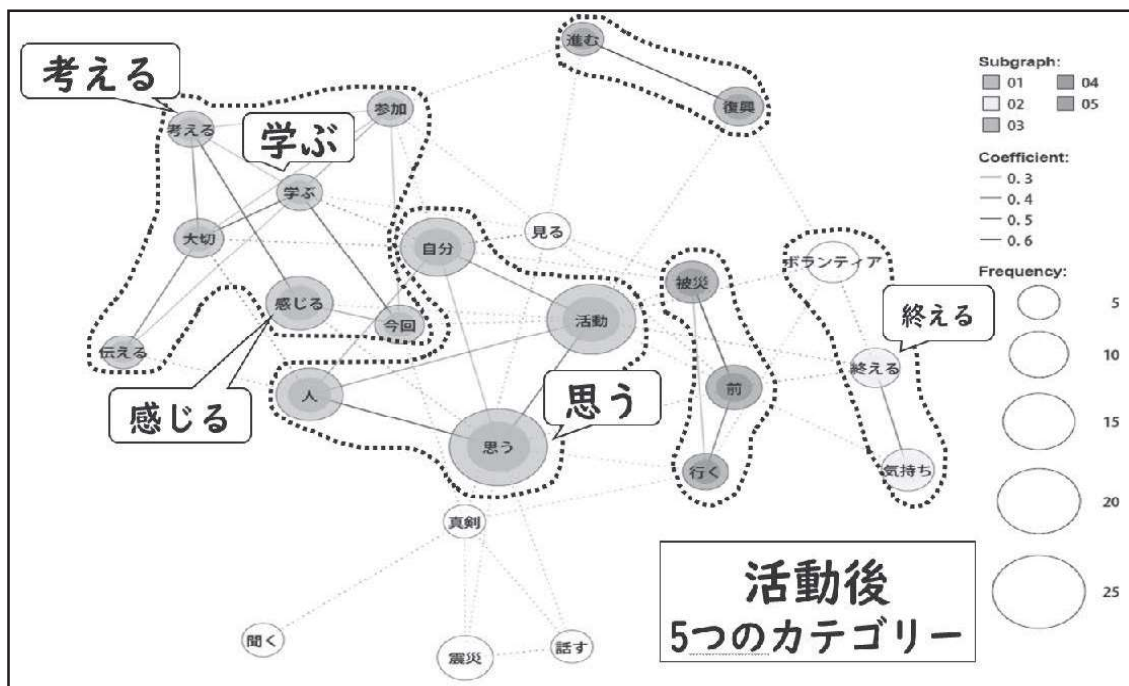


図2 2017年活動後 語の共起ネット 関連語検索

5 おわりに

本学の「東北被災地復興支援活動」は、2011年3月11日の震災直後から動き出した。今回は、2016年から2020年までの5年間の活動の取り組みについて報告をした。筆者(菅瀬)は、第2回目から被災地に出向き活動をした。コロナ感染症拡大の影響で現地での活動は2019年8月が最後になった。活動の様子は写真で載せた。写真に写る東北の人たちの顔の表情が支援活動の回を重ねるごとに笑顔が多く見られるように感じた。東北被災地には訪ねたくなる魅力がある。それは、現地の人との交流だ。交流を通して絆が深められ、温かさ、勇気をもらえるからだと言っている。支援活動に行く前後における感想文のテキストマイニング分析を基に、活動前後の気持ちの変化について検証した結果、活動前は特に「不安」と「心配」、活動後は「思う」、「感じる」、「考える」、「学ぶ」のカテゴリーが抽出された。被災地での活動は、甚大な被害で多くの人々が命を亡くした、という状況下での活動であることから、不安や心配を抱えていたが、活動を実践していく中で、見て、聞いて、感じることで、人のために自ら考え行動できる力、協調性、社会性、思いやりの心(真心)を培うことができ、成長できたと思う。また、自身を振り返る機会になり、命の大切さを学ぶことができたと感じている。2012年から2019年の8年間での現地での支援活動の参加者は、延べ196名、内訳は学生が153名、教職員が34名である。

謝辞

2016年から2020年の現地での活動において、常にサポートをしていただきました、気仙沼市の菊田榮四郎様、菅原進様、大船渡市民ボランティアの水野貞一様、大島小学校児童館の皆様、先生方、津波伝承館館長齊藤賢治様、元大立仮設・轆轤石仮設住宅の皆様、陸前高田市「県営柗ヶ沢アパート」の皆様、石巻市雄勝ローズファクトリーの徳水博志様、気仙沼ホテル観洋の皆様、岡崎市の松井弘様、活動の引率をしていただいた本学教職員の皆様にも、こころよりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 菅瀬君子, 木村典子:「プロジェクト”笑顔の花をさかせよう!” 東日本大震災支援活動 (1), 愛知学泉大学紀要第4巻第1号, 2021, p127-136
- 2) 石巻市立大川小学校
Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki> (2022.1.3アクセス)

参考文献

- 1) 樋口紘一, 社会調査のための計量テキスト分析, ナカニシヤ出版, 2014
- 2) 今関信子: 津波をこえたひまわりさん 小さな連絡船で島を救った菅原進, 株式会社佼成出版社, 2013
- 3) 徳水博志: 震災と向き合う子どもたち 心のケアと地域づくりの記録, 新日本出版社, 2018

(原稿受理年月日: 2022年1月11日)